

政治変革の「とうげ」 2016年から2017年へ

平和で民主的な政治へ力の結集を

石川康宏 (神戸女学院大学教授)さんにお聞きしました



二〇一七年の年頭に当たり石川康宏さん（兵庫革新懇・代表世話人）に当面する情勢と展望、課題について語っていただきました。

アメリカン・グローバリゼーションの行き詰まり

アメリカの大統領選挙では、連帯の社会をかけるサンダース氏と、排外主義的な過激発言を繰り返したトランプ氏が同時に注目を浴び、ヨーロッパでも右翼政党の台頭がある一方、左翼的な政権ができたりもしています。韓国では政権の私物化に対する国民の批判が急速に高まりました。

いずれの動きも、現在の政治に対する強い拒否感を示したのですが、現状からどう抜け出すかという展望の点では、右への変化もあれば、左への変化もあるという状況になっています。

このように拒否されている現状をつくりだした直接の原因は、一九九一年のソ連崩壊をきっかけとしたアメリカによる経済・軍事両面でのアメリカン・グローバリゼーションの展開です。

経済面では投機マネーの活動の自由化を柱とした新自由主義の推進が、世界的規模で貧困と格差を拡大しました。これに各国国民の生活はもはや耐えられなくなっています。

軍事面では、アメリカの一国覇権主義が完全に行き詰まりました。軍事力では、アフガニスタンもイラクもコントロールできず、それだけでなく、ISISのような巨大な「敵」を新たに生み出してしまいました。

それによって生み出された大量の移民の問題が、イギリスの離脱などEUのあり方に大きな影響を与えるなど、世界に大きな混乱をもたらしています。アメリカなど少数の大国が力づくで世界を動かすということとは、もうできないということです。

その中で、ウォール街出身の経済担当大臣、海兵隊出身の国防長官を脇にすえるトランプ政権は、歴史への新たな逆流となっていくのでしょうか。その道に明るい未来はありません。そのような政権に從属する安倍自民党政権の未来にも、光が見えないことは明らかです。

また、核兵器の廃絶をめぐる問題でも、核兵器を保有する軍事大国の孤立がますます深まっています。この点で中国が新たな大国主義の姿勢を顕著にしていますが、もはやそうした大国の横暴が長く通じる世界ではありません。各国間の民主的関係に向けた、世界の構造変化は明らかです。

「危機」の二面性をしっかりとついで

国内では、安倍政権が二〇一四年の集団的自衛権行使容認の閣議決定、一五年の安保法制の強行、一六年の自衛隊に対する「駆けつけ警護」などの命令など、「戦争する国づくり」の道を一直線に進んでいます。他方で、そうした悪政の隠れ蓑としてきたアベノミクスは、異次元の金融緩和の失敗から、TPPの破綻へとつづき、残るのはカジノに頼ることだけというありさまです。

こうした政治に対する市民の批判が、個々の政策への批判を超えて、政権そのものの交代を求めるまでに高まったのは、二〇一六年の特筆すべき変化でした。

参議院選挙では憲改勢力が両院で三分の二を占めるにいたりましたが、これに抗して市民と野党の共闘が生み出した統一候補が、十一の一人区で政権側の候補を破って当選しました。十六年の年頭には想像できなかった勝利です。

医学の世界でクライシス（危機）は、厳しい悪化への道と改善への道の分岐点として「とうげ」という意味で使